

日本語の七層と現象学的優位

—日本語で哲学する—（前）

平 田 俊 博

〔序〕 日本語の性能 — 丸谷才一への反論 —

〔一〕 日本語の多層性

以下、次回

〔二〕 日本語の七層

〔三〕 学術用語としての日本語の四層ないし五層

〔四〕 日本語の現象学的優位

〔五〕 「時間」概念の現象学的諸相 — 時は解キ —

〔結〕 日本語で哲学する

〔序〕 日本語の性能 — 丸谷才一への反論 —

哲学教育のあり方について論じられることが多い昨今だが、本稿では、日本語で哲学することの意義とそのための教育方法について考察したい。

ところで、「哲学」という言葉（表現形式）に二種概念（意味内容）を見いだして、学校概念と世界概念とに區別したのはカントだった。彼によれば、学校概念としての哲学とは、或る特定の知識の体系的統一であり、技術知に属するものであるから、学ぶことができる。例えば、カントの批判哲学とかヘーゲルの法哲学とかについては学ぶことができる。けれども、そうした哲学は本来の哲学ではない。本来の哲学とは世界概念としての哲学であって、全人類だれしもの指針となるべきものである。「誰もが必然的に関心を抱くものに関わる概念が世界概念」（『純粹理性批判』B867=A839）であり、この意味での哲学は目標理念にすぎず、実例となる具体的な完成像がないので、学ぶことができない。精々で、過去の成功例や試行錯誤を参考にして、「哲学することのみを学びうる」（同B866=A838）にすぎない。このようにカントは言うのである。

さて、カントの区分に照らしてみれば、今日の日本で俎上に載せられる哲学教育が、実は学校概念としての哲学教育であるのが分かる。日本には職業哲学者の学校哲学、つまり大学教師の生業としての哲学しかなく、しかも、そのほとんどが時代遅れの輸入品にすぎない、と批難されるのである。ところが、現実には、もつとストレートに心に響く国産の、日本語による哲学が、それも、直面する時代の混迷を打開して未来への展望を切り開く、世界概念としての哲学が、切望されている。

それでは、日本語による世界概念としての哲学というものが、一体、可能なかどうか。また、日本語で哲学することが普遍的な全人類の意義を持つのかどうか。まず、こうした疑問を解決しておかねばなるまい。

それにしても、世間で知識人と称される日本人の多くは、奇妙なくらい、日本語に対して自虐的である。例えば、現代のオピニオン・リーダーでもある評論家の丸谷才一は、「考えるための道具である日本語の性能が低いのではないか」

（朝日新聞二〇〇二年八月一日）と言う。「思考の道具としての言語が整備していない。成熟していない。これが日本語問題の急所、あるいは一番つらい所なのだが、このことは在来ほとんど取上げられなかった。」（同）とも言う。

もし丸谷の発言が正しければ、日本語で哲学することが絶望的となる。哲学することこそ、本来、思考の頂点をなすはずなのに、そのための道具が整備されていないからである。丸谷は自説の理由を三つ述べる。

一、日本語においては生活語と観念語がはなはだしく乖離する。

二、観念語は、明治期に西洋を真似して作られた国家のための国語であり、支配的な伝達の道具にすぎない。

三、国民を操作しやすくするために、日本の国語改革は意図的に、日本語を思考の道具として厳密な論理や精細な分析に適するように改良してこなかった。

しかしながら、私からすれば、丸谷の主張はパラドキシカルで矛盾を含む。つまり、丸谷によれば日本語は思考の道具としては性能が低い（大前提）。丸谷は日本語で思考している（小前提）。丸谷の主張は思考としての価値が低い（結論）。さらに丸谷説に沿って敷衍すれば、観念語で語られる丸谷の主張は支配的な伝達の道具に適しており、したがって、マスメディアを媒体とするアジェンションに向いているから、評論家としての生活を可能とする。

もっとも、「日本語問題の急所」が「思考の道具としての言語」の「整備」にありとした、丸谷の炯眼は高く評価されてよい。日本語問題と言っても、問題は日本語の文法や文章構造に存するわけではなくて、端的に日本語の単語が問題なのである。

それで、いま私が言いたいのは、丸谷が主張するように、仮に日本語の単語が思考の道具として未成熟だとしても、

その責任の一端は評論家など日本の知識人にもあるのではないか、ということである。そのことに類かむりして、日本語の単語だけに責任を転嫁するのは卑怯ではないか、少なくとも、丸谷らしくないのではないかと私は言い返したいのである。とは言え、遺憾ながら、より責められるべきなのが私も哲学教師であることは、否定しがたい。

さて、そこで私は、責めを塞ぐ意味でも、逆に、日本語の単語は思考の道具としてはもとより、哲学用語としても極めて優れている、と主張したい。実は、この点を明確にしてこなかったことが日本の哲学教師の咎ではないか、とすら思っている。

もともと、日本語の独自性や優秀性に関しては、すでに時枝誠記や三上章が、また坂部恵らが述べている。けれども、これらの説は日本文の論理的構造について論じたものであり、必ずしも丸谷説と背馳するものではない。

例えば、時枝によれば、日本文は主語が、述語の入子となる、ないし、風呂敷に依るように述語に包み込まれる（時枝誠記『国語学原論』一九四一年）。また、三上説では、日本文は述語一本立てで主語なしでも成立するから、記号論理からすれば、日本文のほうが論理的である（三上章『象は鼻が長い』くろしお出版、一九六〇年、改定増補版一九六九年）。さらに、時枝や三上の説を継承して哲学的に基礎づけようとした、坂部説に従うなら、主―述二本立ての西欧語の思考は、客観的・概念的・一義的な同一性に基づく近代合理主義の論理に適し、これに引き換え、述語一本立ての日本語の思考は、情緒的・隱喩的・多義的な示差的（*differential*）論理に基づく詩学の論理に適合する（坂部恵『日本語の思考の未来のために——欧米語と日本語の論理と思考』一九七二年、坂部恵『仮面の解釈学』東京大学出版会、一九七六年）。とは言え、文化多元論（ブルラリズム）（坂部恵『鏡のなかの日本語』筑摩書房、一九八九年）に立脚しつつ、西欧語の思考は客観的な近代合理主義の論理に適するが、日本語の思考は情緒的で詩学の論理に適合するとなす坂

部説では、むしろ、丸谷説が補強されかねない。

だが、いま私が、日本語哲学の可能性と優位性の根拠として指摘したいのは、日本語単語の概念上の四層構造である。すなわち、和語、儒教漢語、佛教漢語、近代漢語という、四層の概念が日本語の内部で層を成して住み分けており、このせいで、日本語は人間本性の諸相を極めて精緻にかつ普遍妥当的に分析し記述できるのではないかと私は考えるのである。

つまり、やまと言葉とも称され、ひらがな表記が基本の和語は、日本語の基層語であって、身体生活空間を表現する現象学的用語として適している。その上にある下層語の儒教漢語は、漢代までに成立した本来の中国語で、家族的で前近代的な公共生活空間を表現する文化人類学的ないし社会学的用語にふさわしい。さらにその上部の中層語である佛教漢語は、中国の六朝時代に成立した、パーリ語やサンスクリットからの翻訳語で、思弁的ないし心理学的用語に向いている。上層語である近代漢語は、明治期以降に英語、ドイツ語、フランス語などの、近代欧米語の翻訳語として成立したもので、産業革命後に成立した科学技術用語や、社会契約論以降の社会科学用語として適合している。

何はともあれ、日本語で哲学する際には、これら日本語概念の四層を正確に読み分けることが不可欠だと思われる。そのためには、概念史的分析法に習熟しておくことが必須なのだが、この点が従来の哲学教育で不十分だった。それで、日本語は思考や哲学に向かない、日本語哲学は不可能だ、という誤解が生じたのではあるまいか。

しかも、いま述べた日本語の四層は、あくまでも観念語としての概念上の分類であって、生活用語としては、さらに三層を重ねる。すなわち、根底語としてのローカルな話し言葉と、カタカナ表記の表層語と、アルファベットなどの外層語である。したがって、つこう七層の構造を日本語はもつこととなる。

丸谷才一は、私の言う日本語上層語である近代漢語だけを観念語とし、その他の六層を一括りにして生活語としたようであるが、それでは余りにも大雑把と言えまいか。生活語の三層と観念語の四層が、それぞれ相互にダイナミックに関連し合いながら、日本語の思考は、豊かに、かつ精緻に、展開しうるはずである。考えるための道具として、また、哲学するための道具として、日本語の性能は決して低くはない。もし低いと見なされるのならば、それは日本語の問題ではなくて、むしろ、日本語の可能性を使い尽くせない使い手側の責任ではないだろうか。

ともあれ、身体生活空間の表現に適した和語を基軸にして日本語を俯瞰してみるならば、日本語の現象学的優位が了解されるであろうし、さらにまた、日本語で哲学することの意義も明らかとなるであろう。このことを、以下、本論で詳しく見ていきたい。

「一」 日本語の多層性

日本語に七層を区分し、さらに、概念の上で明晰かつ判明に四層に弁別したのは、管見の限り、先例を知らない。とは言え、日本語や日本文化に多層構造があることを指摘した先学は少なくない。

例えば、和辻哲郎は『続日本精神史研究』の中の論考「日本精神」において、「日本文化の重層性」を力説し、「日本文化の一つの特性は、さまざまの契機が層位的に重なっているということに存する」（岩波『和辻哲郎全集 第四卷』一九六二年、314頁）と述べている。しかも、和辻によれば、各層は並在（Nebeneinander）する。決して、いずれかの層が上位にあって、他の層を過去の残滓に過ぎないとして克服し捨て去ることがない。それで和辻は、次のように言う。

「日本文化においては、層位を異にするさまざまなものが決してその生くべき權利を失っているのではない。超克せられたものをも超克せられたものとして生かして行くのが日本文化の一つの顕著な特性である。日本人ほど敏感に新しいものを取り入れる民族は他にないとともに、また日本人ほど忠実に古いものを保存する民族も他にはないであろう。」
(同)

このように和辻は日本文化の並行的な重層性について語るのであるが、しかし、それでいて、日本語の重層性に関しては必ずしも積極的に明言していない。『続日本精神史研究』中の論考「日本語と哲学の問題」において和辻の念頭にある日本語は、基本的に、彼の言う「純粹の日本語」(同509頁)、つまり和語(やまと言葉)のみである。

和語以外に、伝来の中国漢語(儒教・仏教漢語)から「日本語化した漢語」(511頁)と、明治期に新しく造語された欧米語からの翻訳漢語(近代漢語)である「新しき日本語」(同)についても言及されるが、和辻にとって、これらの漢語は、「特殊な種として特別の区域に囲い込んで」(同512頁)おかれた「学問的用語」(同)に止まる。これに対して、和語は「日常語及び文芸語」(510頁)であって、「無反省なる自然的思惟を……常により強き情意の表現とからみ合わせる」ときもの「なのである。こうした和辻の日本語観は、重層的とか多層的とかよりは、むしろ並行的なものにすぎない。整理すれば次のように表示できよう。

「日本語」

- ① 「純粹の日本語」と「日本語化した漢語」と「新しき日本語」の三種。
- ② 日常語及び文芸語と学問的用語との間に常に距り。
- ③ 言語としての純粹の立場を比較的よく保存。

④感情や意志の表現が表に立つ→日本人の精神生活は悟性的認識よりも道德と芸術を主たる関心。

⑤言葉の知的内容からは何の連絡もない言葉をただ音の同一・類似によつて連絡させつつ、しかもその感情的情緒的な内容のつながりによつて一つの具体的な感情の表現をなし遂げるやり方が高度に発達。

↓日本文芸に著しい一つの表現形式。

↓日本民族の精神的特性。

⑥「言語」を通じて精神生活を解釈しようとする試みにとっては日本語は特に興味深い。

〔A〕純粹の日本語

①和語（やまと言葉）。

②日常語及び文芸語。

③知識的反省以前の体験を表示する表現。

④直接なる実践行動の立場における存在の了解の表現。

⑤「日常語」は学的概念に縁遠く芸術的表現に親近なる言葉。

⑥言語の純粹な姿を比較的に素朴なままで保つ。

〔B〕日本語化した漢語

①中国伝来の漢語。

②仏教や儒教のすでに高度に発達せる概念的知識。

③学問的用語。

④論理的概念内容を表示する語。

⑤日本人の思想の機関。

〔C〕新しき日本語

①近代漢語（明治期に新しく造語された欧米語からの翻訳漢語）。

②日本語化した漢語の新しい組み合わせによって、漢語としての伝統を振り払った「言語上の革命」で成立した「新造語」。

③ヨーロッパの学問の伝統をそのまま受け入れ得る学問的用語。

④初めより概念内容を表示するものとして現れてくる。

⑤民族の体験に根ざした「意味」を担うことと少ない。

和辻の並行的日本語論の要点を簡条書きに表示してみれば、概ね以上のようなようになろう。こうして見れば、丸谷説も坂部説も基本的に和辻説を踏襲しているようである。と言うのも、丸谷の言う生活語と観念語の対立は、和辻説における「純粹の日本語」（和語）と「新しき日本語」（近代漢語）の対比に相当するからである。また、西欧語の思考は客観的な近代合理主義の論理に適するが、日本語の思考は情緒的で詩学の論理に適合する、としている坂部説も、「西欧語」が和辻の「新しき日本語」（近代漢語）に対応し、「日本語」が同じく「純粹の日本語」（和語）に対応する。

ただし、両者がともに「日本語化した漢語」（中国伝来の漢語）の位置づけを明示していない点で、踏襲も部分的に止まると言えよう。さらに、日本語の性能と日本語での哲学的思考とに関して、和辻が楽観的であるのに対して、丸谷

は極めて悲観的であり、坂部は些かシニカルであるのが、注目される。

たとえば、坂部は最近でも、「日本における哲学制作の可能性」ということは、ひろく考えれば、日本語によることをかならずしも必須の条件として含まない。」(坂部恵「日本哲学の可能性」二〇〇〇年、坂部恵『モデルニテ・パロック—現代精神史序説』哲学書房、二〇〇五年、228頁)と明言している。外国語に翻訳されても日本哲学であることが変わるわけではないし、日本哲学の可能性とは日本における哲学制作の可能性でしかない、と考えるからである。坂部によれば、「日本語というフィルター」は哲学制作にとって仮初めのものにすぎない。ドイツ語というフィルターを介してドイツ哲学が成立し、フランス語というフィルターを介してフランス哲学が成立するように、日本哲学も日本語というフィルターを介して成立する。けれども、ドイツ哲学やフランス哲学と同様に、日本哲学のアイデンティティーそのものも、「流動性をはらんだ仮のもの」(同)でしかない。

ところが、和辻からすれば、「それぞれの特殊な言語を離れて一般的言語などというものがどこにも存しない」(前掲書、509頁)。「言語のごとき具体的な生の表現は精神的な理解なしに取り扱われ得ない」(同)からである。「言語の構造は国民の精神的特性そのもの」(フンボルト)なのである。それで、日本語と哲学の問題だが、「日本語は哲学的思索にとって不向きな言語ではない」(同551頁)と和辻は断言する。けれども、日本語には理論的方向における発展の可能性があるのに、その可能性をまだ実現できていない。日本語は「哲学的思索にとっていまだ処女」(同)に止まる。「日本語をもって思索する哲学者よ、生まれいだよ。」(同)と、和辻は後生に望みを託する。

さて、日本語に関する和辻の指摘は、まだ直観的で抽象的な域を出ない。しかし、近年に至り、日本文化や日本語の

多層構造に関する、より具体的でより実証的な理論が公表されている。代表的なものとして、佐々木高明の日本文化多重構造論と石川九楊の二重言語国家日本論を挙げることができよう。そこで、以下、これら二つの理論について詳しく見ていきたい。

まず、民族学者の佐々木高明『日本文化の多重構造』小学館、一九九七年）によれば、日本の基層文化の形成には四つの大きな画期があった。第一の画期は、今から約一万二千年前に成立した縄文文化であり、東北アジアのナラ林帯（落葉広葉樹林帯）の食料採集民の文化と言語（原東北アジア語）を基盤とした。第二の画期は、今から約五千年前に西日本に展開した照葉樹林文化であり、東南アジアの焼畑文化や言語（オストロネシア系原語やチベット・ビルマ系言語）が伝来して、日本列島の一部で言語のクレオール化（言語混合）が進行した。第三の画期は、今から約二千四百年前に成立し出した弥生文化であり、朝鮮半島から新モンゴロイドの人々が渡来して、水田稲作文化や金属器文化と共に、アルタイ系の言語を伝来した。さらに、この頃、中国南部や南島系の言語も伝来して、混合語としての日本語の根幹が形成された。最後に第四の画期は、今から約千六百年前に成立した古墳文化であり、朝鮮半島から支配者文化が渡来して日本の民族文化の基層が完成し、上代日本語が形成されるに至った。

このように日本文化は多元的な起源を有するのである。系統や系譜の全く異なる諸文化が蓄積され、多重な構造を形成しながら、日本文化の基層と成っている。異質で多様な諸文化を容易に受け入れ、しかも、それらを次第に統合していくプロセスにおいて、全く独自の文化的特色を創造する日本文化の特徴を、佐々木は「受容・集積型」（同319頁）の文化と名づけている。多様な文化にさまざまな形で対応できる柔軟性をもつのが、受容・集積型文化の特徴である。それゆえ、多元的で多重構造の日本文化は、二十一世紀のグローバルな、多民族多文明の時代に容易に適應できるはずな

のである。

さて、佐々木によれば、日本民族の基層文化には上述の通り、大枠としての次の四画期がある。

〔第一画期文化〕 縄文文化・東北アジアの落葉広葉樹林文化・食物採集文化・原東北アジア語

〔第二画期文化〕 西日本文化・東南アジアの照葉樹林文化・焼畑文化・東南アジア系諸言語と混合

〔第三画期文化〕 弥生文化・朝鮮半島の新モンゴロイド渡来人文化・水田稲作文化・金属器文化・アルタイ系言語

や中国南部言語や南島系言語とも混合してクレオール語としての日本語の根幹が形成

〔第四画期文化〕 古墳文化・朝鮮半島からの支配者文化・日本民族文化の基層が完成・上代日本語の形成

だが、その中でも、日本文化の形成に最も大きな影響を与えたのが、第三画期の水田稲作文化だった、と佐々木は言う。縄文時代の末期に、中国大陸からやってきた水田稲作農耕は、金属器文化などのハードウェアと共に、宗教的世界観や社会的統合原理などのソフトウェアをも、新たに東海の弧島列島日本に持ち込んだ。そうして日本文化の形成に重大な影響を与えたのだった。したがって、その後の日本文化の形成史は、佐々木説に従えば、稲作文化と非稲作文化の相克の歴史となった。

ところが、表面的には日本文化は、確かに稲作文化に収斂する傾向が強かったのではあるが、それでいて、簡単に吸収、同化されてしまうほど、非稲作文化がひ弱だったわけではない。例えば、第二画期の照葉樹林文化に由来する文化要素が、今日でも、日本文化の伝統の中に広く認められることを佐々木は指摘する。具体的には、餅や納豆、麴酒、そして茶、あるいは山の神信仰や山上他界観などである。こうした非稲作文化の伝統こそが、「日本の文化の基層

に分厚く堆積して、多重で柔軟な構造をもつ日本文化の特色を形成するための、もっとも重要な基礎条件」(同321頁)を作り出しているのである。

ここで、佐々木説を私なりに整理して哲学的に理論化してみれば、次のように表示できよう。

[A] 日本文化の裏基層Ⅱ非稲作文化

(a) 日本文化の底基層Ⅱ縄文採集文化

(b) 日本文化の下基層Ⅱ東南アジア焼畑文化(西日本)

[B] 日本文化の表基層Ⅱ稲作文化

(c) 日本文化の中基層Ⅱ弥生水田文化

(d) 日本文化の上基層Ⅱ上代日本語古墳文化

つまり、日本の基層文化は、表の稲作文化と裏の非稲作文化の二双に大別でき、さらに、それぞれが表と裏に細別できて、つごう四重の層へと区分けできる。だが、それでいながら、これら二双四重の各層が行儀良く整然と上下に分離できるわけではなくて、それぞれが自律的システムを貫徹しながら、二双の層全体としても、あるいは、四重の層全体としても、宛ら糾える縄の如くに調和する。「るつぽ型」のように、何でも彼でも原型を留めぬまでに熔融するのではない。と言つて、「サラダボウル型」のように、雑然と混在に任せるわけでもない。二双四重がそれぞれに首尾一貫しながら、時と場所に応じて所在を変じて、あるいは表となり裏となり、あるいは斑となつて表面に占める位置と量を競い合う——こうした「糾える縄型システム」が、受容集積型の日本文化の多重構造を特徴づけているのではないか、と

私は言いたい。

多元的とは言っても、るつぽ型でもサラダボウル型でもない、二双四重の柔構造が、日本文化独特の「糾える縄型システム」なのである。しかも、この柔らかなシステムは、佐々木説の射程をも越えうる。つまり、二双四重の層構造の上と下に、さらに、しなやかに別の層を受容し、かつ集積できるのである。それゆえ、私は佐々木の日本文化多重構造論を発展的に継承して、日本哲学の立場から、新たに日本文化多重柔構造論を提唱したい。こうすることで、日本文化が、なぜ受容・集積型文化なのか、なぜ多様な文化にさまざまな形で対応できる柔軟性をもつのか、なぜ二十一世紀のグローバルな多民族多文明の時代に容易に適応できるのか、を哲学的に解明していきたい。

ところで、佐々木の日本文化多重構造論を私の日本語論に照らしてみれば、最下層の根底語に対応するのが、第一期の縄文文化と、西日本に展開した第二期の照葉樹林文化である。そして、第二層の基層語である和語ないしやまと言葉に対応するのは、第三画期の弥生文化となる。また、第四画期の古墳文化は、下層語の儒教漢語に対応する。『古事記』や『日本書紀』によれば、この頃に、朝鮮半島西南部に栄えた百済から、漢の高祖の後裔と言われる王仁（和邇吉師）が「論語」十巻と「千字文」一巻をもたらした。本格的な文字文化の開始と言ってよい（山口明穂他『日本語の歴史』東京大学出版会、一九九七年、13頁参照）。文字と文法の導入に伴って、政治的共同体としての原日本の骨格が定まり、上代日本語が形成されていくこととなった。これに比べて、根底語はもとより、日本語の根幹ともされる基層語の和語もまた、統一的国家成立以前の前日本語に止まる。未だ日本が日本として成立していないという事情に加えて、当時の使用語がなお話し言葉の段階を越えず、書き言葉の段階に至っていないからである。

原日本語は儒教漢語と前日本語とから成る、と言ってよい。書き言葉である漢字と、話し言葉である前日本語との二

本立てなのである。それが、音・訓という独特な文字の読み方に結びついていった。したがって、日本語は、その成立からして、構造的に二種の語源をもちうる。漢語としての語源と前日本語としての語源である。言語学者の新村出の区分を当てはめれば、学者的語源と民衆語源とである（倉島長正『日本語一〇〇年の鼓動』小学館、二〇〇三年、139、293頁参照）。民衆語源は自然発生的なものであるから、その出自を究極的に確定することは、端からありえない。そこで、語源そのものよりも、語史が問われてくる。『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇一年、第5巻）によれば、「語史」とは、「二つのことばの語源や語形・語義・用法の変化などを記したものである。さらに、「そのことばの使われる地域、使われる場面などによる、違い、類義語との使い分け、使われる社会的・文化的背景などについても述べる時」には、語史に代えて、「語誌」が用いられたりする。語誌の研究は方言語彙の充実につながり、結果的に『日本方言大辞典』（小学館、一九八九年）の刊行に結実した。

新村の師である上田万年は、語源に関して、中国出自の漢語を区別すべきこと、その他の外来語については原語を示すべきことを強調する。これに引き換え、弟子の新村は、究極の語源にこだわることなく、語を歴史的に跡づけるべきことを力説している。先述の語誌に相当する「語史語歴」（倉島293頁）に殊の外思い入れが深かった新村は、一々の漢語が日本へ入ってきた経緯や、その後の変遷に直目している。漢語を介して入ってきた梵語（パーリ語など）ブラークリットやサンスクリット）の扱いにも言及する。さらに、南蛮語との関係やヨーロッパ出自の外来語についても、入ってきた事情や時期を具体的に説明しようとした。

そこで、私は、上田万年や新村出の語史論に立脚して、漢語伝来以降の日本語論を哲学的に整理してみた。すると、下層語の儒教漢語と中層語の仏教漢語と上層語の近代漢語が区分できた。この区分の根拠と内容については、いずれ第

三節「學術用語としての日本語の四層ないし五層」で、詳しく見ていくこととしたい。

翻って、書家の石川九楊は、書字という極めて独創的な視座から、日本語と日本文化について論じている（石川九楊『二重言語国家・日本』NHKブックス、一九九九年）。石川によれば、文字とは書字に他ならず、「日本語は書字中心言語」（同35頁）である。文字とは書かれた言葉であり、その現場では、筆順や語順、さらには筆触をも含めた肉筆行為であって、これに引き換え、活字は代用文字にすぎない。話し言葉が書き言葉である文字を必要とし、文字を使うこと、つまり書字することが、文字を再生産し、蓄積、累乗して、文化と文明の加速度的展開を可能にした、と主張するのである（同39頁）。

書字行為の観点から見れば、日本語は三種類の言葉が複雑に入り組んだ二重性言語である（同31—33頁参照）。三種類とは、漢語流入以前の無文字時代の種々雑多な前日本語と、漢語の語彙と、漢語流入後に漢語に対応するべく新造された和語を指す。平仮名による和歌を通して、漢語の和語化と和語の漢語化という複線訓練が進行し、日本語が世界に稀有な「音訓複線言語」（同33頁）として組織された、と石川は主張する。

漢語の和語化、和語の漢語化という「二重・複線化運動」（同129頁）の過程は、書きぶりの文体とも言える書体によってたどるのが、一目瞭然で分かりやすいらしい。それによると、日本語の形成を開始したのは天平時代で、奈良を都としたその頃に、中国型の安定した書きぶりの天平写経が盛んだった。その後、京都に遷都した平安初期に日本の書の始まりがあった。空海、嵯峨天皇、橘逸勢の三筆の書である。これを石川は、「中国書の核心部に位置する王羲之の書その中軸にすると同時に、中国への異和と文化的独立への意志を維体書と呼ぶグロテスクな表現に込めた」（同131—

日本国や日本語が太古から存在したものでなく、歴史上のある時期に生まれたものである、と考える点で、私と石川九楊は合致する。しかし、その先、つまり、日本語の歴史の区分については、見解が分かれる。もともと、これは哲学者と書家の目の置き所の差にすぎず、正否とか優劣とかの問題ではない。

石川の書字史観に従えば、日本史は日本語の歴史と相似形であって、次の五段階に区分できよう(同113・114頁参照)。

第一段階、汎太平洋・汎アジア時代、紀元前二〇〇年頃以前。多言語・無文字時代。国家未成立。

第二段階、中国時代、紀元前二〇〇年頃〜後六五〇年頃。二層言語時代、漢語⇔漢文⇔漢字の公用語と無文字の生活語。大陸国家中国の一部。

第三段階、擬似中国時代、後六五〇年頃〜一〇〇〇年頃。音訓の万葉仮名時代。中国への政治的独立と文化的従属。

第四段階、日本時代、一〇〇〇年頃以降。二重複線言語としての日本語の基本構造確立時代、三種類の文字の発明、平仮名・片仮名・和祿漢字。完全独立国家。

第五段階、日本文化確立時代、日本中世(中国の宋元明代)。中国の同時代の言語が流入して日本語の内実が向上、現在の日本語の直系の祖。

さて、日本語を二重言語構造とするか三重言語構造とするか、という点で、石川理論には小さな揺らぎが内在する。片仮名の正書法が現在なお未確立なので(同202頁参照)、書字史観に立てば、漢字⇔漢語と平仮名⇔和語の二重言語構造だと言わざるをえないが、それでも、片仮名⇔西欧語の事実を無視できないからである。

ともあれ、石川が力説するところでは、日本文化の特殊性は、漢字と平仮名と片仮名の三種類の文字をもつ特異さにある。その意味で日本は、むしろ三重言語国家と言うべきなのである。そうしてこそ日本語と日本文化の歴史的独自性が明白となる。二重言語国家と言うならば、石川も認めている通り、韓国にも当てはまるからである（同33頁）。

日本語の兄弟語である韓国語も、中国語を核として生まれた二重言語であり、漢字とハングル文字とから成立する。ただし、第二次世界大戦以後、韓国も朝鮮民主主義人民共和国も、日本の植民地政策の残滓を払拭するために、かつ、中国文化圏からの完全自立を目指してか、意識的に漢字を排除してきた。その点で両者いずれも、現在、二重言語国家としての存立の岐路に立っている。

日本もまた、別な意味で、目下、二重言語国家としての存立の岐路に立っている、と言えよう。と言うのは、石川に言わしめれば、「当座の仮り物」（同202頁）にすぎなかった「不完全な文字」（同201頁）の片仮名が、一九七〇年代のバブル経済の始まりと共に跳梁するからである。ともあれ、もはや片仮名の位置づけを疎かに済ますことはできない。それで私は、カタカナ語を表層語として、七層から成る日本語の正式の一員に編入することにした。

ところで、石川説と佐々木説の違いは、時代区分の決定的要因を求めるに際して、佐々木が稲作の有無に拘るのに対して、石川が文字の有無を重視する点にある。だが、いずれにせよ、縄文文化と弥生文化の間に切れ目を入れることは一致するのであるから、実質的に同じだと言えよう。書字学上の区分か、それとも、文化人類学上の区分か、と言う視座の相異に起因するにすぎない。

また、石川説と私の説の違いは、石川が日本語を、基本的に、漢字と平仮名の二重言語構造において捉えているのに対して、私が、もう一つカタカナを加えて、三重言語構造として把握する点である。

ともあれ、佐々木高明と石川九楊と私は、日本語に多層的構造を承認する点において、完全に一致する。(続く)